

剝物腰掛に関する一考察

—乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片の検討から—

鈴木 裕 明

目 次

I. はじめに	51
II. 刳物腰掛に関わる研究略史	51
III. 乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片の観察と類例刳物腰掛・脚付 槽の検討	52
IV. 大和での精製刳物腰掛の受容とその背景	60
V. まとめにかえて―腰掛形埴輪との比較―	61

論 文 要 旨

奈良県乙木・佐保庄遺跡で出土した精巧な造形ながら用途不明の木製品について、鳥取県松原田中遺跡・青谷上寺地遺跡出土の刳物腰掛にふれ、その脚片の可能性を考えた。本論は、類似する脚をもつ木製品との比較検討からその蓋然性を示し、大和で受容された過程・背景、当該木製品の性格についての考察である。

乙木・佐保庄遺跡例の特徴である脚間をつなぐ横木が一木から作り出される類例を検討し、その典型例が青谷上寺地遺跡にあることから、この類型を「青谷型」とした。この類型は弥生時代前・中期の北部九州に淵源をもち、弥生時代後期末に山陰で成立したと考えた。具体的な成立地は、刳物腰掛の青谷上寺地遺跡内での発展や完成度から因幡地方とした。そして山陰から乙木・佐保庄遺跡例をつなぐ資料に「青谷型」刳物腰掛が認められないなかで、「青谷型」の脚をもつ刳物脚付槽や乙木・佐保庄遺跡例と同様に座板裏面四方に脚が作り出され、精巧な作りの刳物腰掛から山陰から北陸そして近江湖東・湖南を經由して古墳時代前期初頭の和歌山へという伝播経路を考えた。用材はスギを主体としたものから、大和の受容にあたって王権中枢が重要視したコウヤマキ、ケヤキへの転換を想定した。

精製刳物腰掛出土遺跡の相伴木製品から、精製刳物腰掛と木製装飾高杯、団扇形木製品がセット関係で祭儀に用いられ、その祖形も山陰で成立し、大和に受容されるなかで古墳時代前期初頭の纏向遺跡で王権中枢の祭儀として整えられ、乙木・佐保庄遺跡にも引き継がれるとした。その間伝播ルートを遡上する形で近江湖東・湖南から北陸、一部の器物は東日本へ展開したと考えた。結論としてこれらの祭儀の様子を象徴的に形象したのが腰掛形埴輪、高杯形埴輪であり、倚座人物埴輪にみられる腰掛と塵尾であったと考えた。

鈴木 裕明（すずき ひろあき）

奈良県立橿原考古学研究所 調査課長

I. はじめに

筆者が『乙木・佐保庄遺跡』（奈良県遺跡調査報告第92冊）の図2-26で報告した木製品がある¹⁾。その形状は表面が木槌状を呈し、縦長の造形部と横木が一木から作り出されている。造形部の上部と横木の一方を欠失し、両者の取り付けには横木から連続する一段低い張り出しが設けられている。造形部は表面及び両側面が弧を描くものである。木取りは横木取りで、樹種はケヤキである。報告時には不明木製品としていたが、弥生時代後期～古墳時代前期の鳥取県松原田中遺跡出土刳物腰掛の脚片を実見し、その全体像が復元できるほぼ同時期の同県青谷上寺地遺跡例を検討することで、乙木・佐保庄遺跡例が刳物腰掛の脚片ではないかという考えに至った²⁾。

その概要については、別稿で触れたところではあるが³⁾、具体的な比較資料や、検討過程については示しておらず、本論で乙木・佐保庄遺跡例が刳物腰掛であることの蓋然性を、類似する脚をもつ木製品との比較検討から導き出し、所属時期・分布から大和にもたらされた過程・背景、当該木製品のもつ性格などについて考えてみたい。

II. 刳物腰掛に関わる研究略史

本論に入る前に、木製刳物腰掛に触れた既往研究をみていきたい。遺跡出土の木製腰掛を初めて類型化して検討したのは、置田雅昭氏である⁴⁾。『ニゴレ古墳』発掘調査報告書において、古墳時代の「石製・埴輪・木製の椅子」を検討している。「木製の椅子」については、弥生時代後期～古墳時代にかけての資料を集成し、座板の長軸に対し、脚の付き方で大別し、前後に脚が付くものを1類、左右に付くものを2類とした。また1類はすべて刳物、2類はすべて指物であることも明らかにしている。1・2類はともに弥生時代後期からみられ、古墳時代に引き継がれたとする。1類はさらに細分され、座板の平面形において中央側面が湾曲して幅広く、両端寄りが幅狭くなった横長の形で、両端を棒状に断面丸く作り出しているものを1A類とし、その脚部は外反して裾広がり形状であるとする。該当する資料は、この段階で判明しているのはいずれも古墳時代中期のもので、奈良と大阪の近畿中央部にのみみられる。そしてもう一つ、尻受けの平面形が楕円形ないし隅丸方形の資料を1B類とする。1B類の脚部は長方形ないし台形で、1A

類のような裾広がり外反する形状はとらない。1B類は弥生時代～古墳時代にかけてみられ、分布も近畿中央部から関東までであるとしている。1A類については、メスリ山古墳や新山古墳、佐紀陵山古墳などから出土している腰掛形石製品、赤堀茶臼山古墳などから出土している腰掛形埴輪との共通性を指摘しているが、直接の祖形ではなく、携帯用腰掛である床几（胡床）のようなX字形の脚に棒を組み合わせ、皮革や布を張って尻受けとしたものを祖形と考えている。また1A類自体も弥生時代以来の刳物腰掛が、外来の文物である床几の影響を受けて古墳時代に入って成立した可能性を考えている。

『木器集成図録 近畿原始篇』のなかでは上原真人氏によって、木製腰掛の集成と解説がなされている⁵⁾。上原氏はまず椅子と腰掛を定義し、背もたれやひじ掛けのついた座具を椅子、弥生時代～古墳時代の木製脚付座具には背もたれやひじ掛けが結合した確証がないことから、これらを腰掛と総称するとした。また、木製腰掛を座板と脚とを一木で作りに出した刳物と別材を組み合わせた指物に大別している。本論に関わる刳物腰掛については、近畿の事例の集成内容とともに、弥生時代前期～古墳時代後期の北部九州～関東の事例が紹介されている。木取りは原則として横木取りであること、座板の長辺と並行に2脚が長くのびるものと、各脚の下面中央を刳り込んで4脚にするものがあることを指摘する。座板の平面形については前述の置田分類に長方形を呈するものを加える。側面形では多くが中窪み気味で、両端に向けて緩やかに反り上がり、尻受けを意図しているとする。刳物腰掛の外側からみた脚形態で、上辺と下辺の長さが等しい長方形のA類、下辺がやや長い台形のB類、下辺が著しく長く脚端面が湾曲しつつ幅を増すC類、下辺が短い逆台形をなすD類の4つに分類している。A類は弥生時代～古墳時代にみられるが、弥生時代前期～中期のものはすべてA類であるとする。B・D類は弥生時代後期～古墳時代に、C類は古墳時代前期・中期にみられる。C類は前述の置田分類の1A類に該当し、腰掛形石製品・埴輪の脚の形態が共通するとしている。弥生時代後期以降指物腰掛が出現し、古墳時代に入ってその事例が増加しても、伝統的な刳物腰掛が威儀具として好まれ、石製品・埴輪のモデルとなった可能性を指摘している。

塚田良道氏は人物埴輪の座り方から古墳時代における座り方と座具の検討を行ったなかで、木製腰掛について触れ

ており⁶⁾。前述の上原分類C類が腰掛形埴輪のモデルとすることに対して疑問を呈し、その理由を、刳物腰掛は高さが20cm前後と低く、一方で人物埴輪の腰掛は十分に足を垂らすことができる高さに表現されていることをあげている。また、日本古代における坐の系譜について、東アジアの事例と比較検討を行い、中国における胡床の形態と普及状況から、古墳時代前期初頭に中国の胡床の影響を受けて成立した腰掛形埴輪・石製品のモデルとなるような高さのある未発見の指物腰掛が存在していたのではないかとしている。

広瀬和雄氏も埴輪・石製品・木製品による「古墳時代の椅子」を総合的に検討している⁷⁾。指物腰掛については、座板の尻受け部分が平坦なものが多く、座板の短辺と平行して脚部が取り付けられているが、腰掛形埴輪・石製品にはそのような座板・脚が表現されたものはなく、モデルではないことを指摘している。また、腰掛形石製品がメスリ山古墳例を代表例として古墳時代前期の政権中枢の大和の巨大・大型古墳にみられることから、モデルとなる木製腰掛は、中央政権を担った有力首長層の威儀具だった蓋然性が高いとする。腰掛形埴輪と他の器財埴輪の埴頂部での配置状況について、月の輪古墳を例にとり、腰掛は蓋とあいまって貴種の存在を顕彰するとし、首長層の権威を体現する道具立ての一つであったとみている。ただし、刳物腰掛をモデルに石製品や埴輪が成立したとするのは、塚田氏と同様に疑問を呈している。刳物は原材の大きさに制約を受け、倚座人物埴輪に表現された腰掛に見合う大きさにはならず、刳物腰掛の形態を踏襲した装飾性の高い指物腰掛が古墳時代前期の畿内地域などの首長層に採用された可能性を示唆している。

小泉和子氏も遺跡出土の木製品・埴輪・石製品の腰掛を集成し、総合的に検討している⁸⁾。刳物腰掛については、弥生時代前期～古墳時代後期にかけての北部九州から関東の資料が集成されている。まず、腰掛と椅子の別を上原氏と同様の内容で定義する。木製腰掛については、座板・脚の大きさと形状を検討し、指物に比べて刳物のほうが全体に小型で低いことを指摘している。その上で指物は腰掛として矛盾はないが、刳物は腰掛としては使いにくく、枕ではないかと指摘する。そして古墳出土の石枕、埴製枕、石棺作り付け枕の形状を検討するが、枕とした刳物腰掛との共通点は見出せないと結論づけた。腰掛形埴輪・石製品のモデルとしては、置田氏・塚田氏・広瀬氏と同様、中国由来

の胡床をあげる。そして胡床の座と枕の脚が融合した観念上のモデルを模倣して腰掛形埴輪・石製品が成立したとした。なお、この2012年の小泉論文以前には、言及されなかった青谷上寺地遺跡例と姫原西遺跡例の座板下面の長辺片側3脚で計6脚が作り出され、さらに脚と脚をつなぐ横木をもつ、本論の乙木・佐保庄遺跡例の検討において重要な事例が初めて取り上げられている。

以上、既往研究から出土刳物腰掛は、指物腰掛に先行して弥生時代前期から存在し、古墳時代にかけてみられ、九州から関東まで分布することがわかる。高さは指物腰掛と比較すると低いものが多く、20cm前後である。また、上原分類の刳物腰掛C類が腰掛形埴輪・石製品のモデルとして検討されており、類似性は各研究とも認めているものの、倚座人物埴輪の人物と腰掛の大きさの関係から、直接のモデルとするには否定的な意見が多い。高さから刳物腰掛を座具とすることを否定する意見もある。ただ刳物かどうかは別として埴輪・石製品のモデルとなる腰掛自体は、首長層の権威を示す道具立てであったことは各研究で一致している。

本論では、埴輪・石製品のモデルは、刳物腰掛とする立場をとる。既往研究ではモデルの検討として俎上にあげたのは刳物腰掛C類であるが、本論で指摘するようにD類をモデルとした埴輪の存在が確認できるからである。刳物腰掛の2つのタイプをモデルにした埴輪の存在は、未発見の中国由来の胡床に影響された指物腰掛をモデルと考えるよりは、出土例のある刳物のほうがモデルとしてふさわしい。倚座人物埴輪の人物と腰掛の大きさの問題は残るが、刳物腰掛はまず器財埴輪として形象されることから、一義的には腰掛の形状に着目すべきと考える。刳物腰掛の高さから座具にふさわしいかという問題も、東アジアをはじめとする世界各地の民族例に高さ20cmに満たない木製腰掛は多数存在すること⁹⁾を参考に、座具として機能すると考えた。これらを前提として以下論を進めていきたい。

Ⅲ. 乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片の観察と類例刳物腰掛・脚付槽の検討

(1) 乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片の観察

①乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片の形態と木取り(図1)

A. 形態

刳物腰掛の脚片¹⁰⁾とみられる乙木・佐保庄遺跡例は、一木から座板底面の四方に作り出された脚とそこから横方向に同じく一木から作り出された横木からなる。脚は残存高13.9cm、両辺とも上方へ向かって弧を描く形状となる。下端幅は5.7cm、最も幅が狭まる中央やや下方で5.0cmである。脚部上端は、ほぼ水平な形状を残すが、上端面は座板との剥離を示す粗いややさくれ立った面となっている。上端の残存幅は8.3cmである。脚部表面と外側面は凹面を形成し、平滑に仕上げられ、加工痕は認められない。厚さは上端で4.9cm、最も薄くなる中央やや下方で4.2cm、下端で4.6cmである。下端面は平坦で加工痕が認められない平滑な仕上げで、内面も平坦で加工痕は認められないが、やや粗い面のままの仕上げである。脚部内側面には上端から3/4程の位置まで幅1.3cm・厚さ1.5cmの一段低い張り出しがあり、その下端から前述の横木がのびる。この張り出し及び横木の内面は脚部内面から連続する平坦面となる。横木は先端を欠損するが25.0cm遺存し、表面・上下面は平滑で丁寧な仕上げとなっている。断面はやや横長の隅丸方形で、幅1.8cm、高さ1.5cmである。脚は、現状の表面上辺残存幅が、横木の残存する先端までが33.4cm、下辺の同じ所までの残存幅が31.4cmで、下辺がやや狭くなる逆台形に復元でき、脚形状では上原分類の刳物腰掛D類に分類できる。

B. 樹種と木取り

乙木・佐保庄遺跡例は、報告書作成時に樹種同定を行っており、前述のようにケヤキであることが判明しており、その特徴である大型の管孔が年輪の境目に沿って並ぶ様子が木口面に肉眼でも観察できる。ケヤキを用材として、一木から座板と脚部を作り出していたとみられ、木取りは、端面側を木口面側にした横木取りである。刳物腰掛としては一般的な木取りであるが、比較的多くみられる中小径木利用の座板長辺両側に作り出された脚が樹心を跨ぐ形の木取りではなく、脚表面を樹皮・樹心それぞれに向けた木取りで、樹心を避けた分厚い柃目の板材から成形されたと考えられる。乙木・佐保庄遺跡例は、脚の木口面側の年輪をみると、ほとんど乱れがなく緩やかできれいな曲線を重ねている。1cmにつき10～11本の年輪が数えられ、年輪密度が高い良質な材を利用したといえる。この年輪曲線から原材となる分厚い柃目板がとれる丸太材の大きさは、少なくとも直径約65cmは必要であり、おそらくこれより大きい

ケヤキの大径木利用であったとみられる。

②出土遺構と相伴遺物

乙木・佐保庄遺跡では古墳時代前期の木製品は2条の河道(SD03・05)とその間をつなぐ溝(SD04)から出土した。報告書では、SD03以北とSD05以南に古墳時代前期遺構がほとんど確認できなかったことから、SD03・04・05で囲まれた平坦面が流路・溝から出土した木製品などの遺物を使用された場とした。外来系土器を含む大量の土器も出土しており、同じく大量に出土した木製品のなかに木製威儀具及び関連木製品が存在することから、多数の人々がこの空間に参集し、首長クラスの人物が主催した祭儀が行われた場と推測した。

出土した土器の層位的な取り上げによるその土器の型式の特徴からSD03・04・05出土土器は、古墳時代前期初頭～前半の古式土師器であり、古いほうから順に乙木Ⅰ～Ⅲ段階に設定した。上記の祭儀空間で大量の土器・木製品が使用されたのが、乙木Ⅱ・Ⅲ段階であり、首長クラスの人物が主催した祭儀が行われた期間であったとみている。今回検討の対象とした乙木・佐保庄遺跡出土木製品は、この段階に帰属するもので、SD03から出土している。相伴する木製品には、翳形木製品、案、曲物底板、片口付槽、棹、履物、刀剣鞘、建築部材などがあり、精巧な作りで丁寧な仕上がりのものが多い。

(2) 類例刳物腰掛・脚付槽の検討

①乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片の類例

乙木・佐保庄遺跡例の脚部の特徴としては、表面の形状が刳物腰掛D類に分類される逆台形になること、座板下面四方に4脚が一木から作り出されていたとみられること、さらに長辺方向に脚と脚をつなぐ同じく一木から作り出された横木があることである。これらに該当する類例としては、座板下面に長辺片側3脚で6脚が作り出された刳物腰掛D類など以外に、長辺片側2脚で4脚が作り出され、同じく横木をもつ刳物脚付槽がある。以下では、類例として管見に上がった刳物腰掛と刳物脚付槽及びその成立・展開に関わる事例について検討する。

②刳物腰掛

A. 脚に横木が造形される刳物腰掛(図2・表1)

乙木・佐保庄遺跡例(1)の類例のなかで全体像が把握できるのが、青谷上寺地遺跡出土の弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の事例(2)である¹¹⁾。スギを用材として一

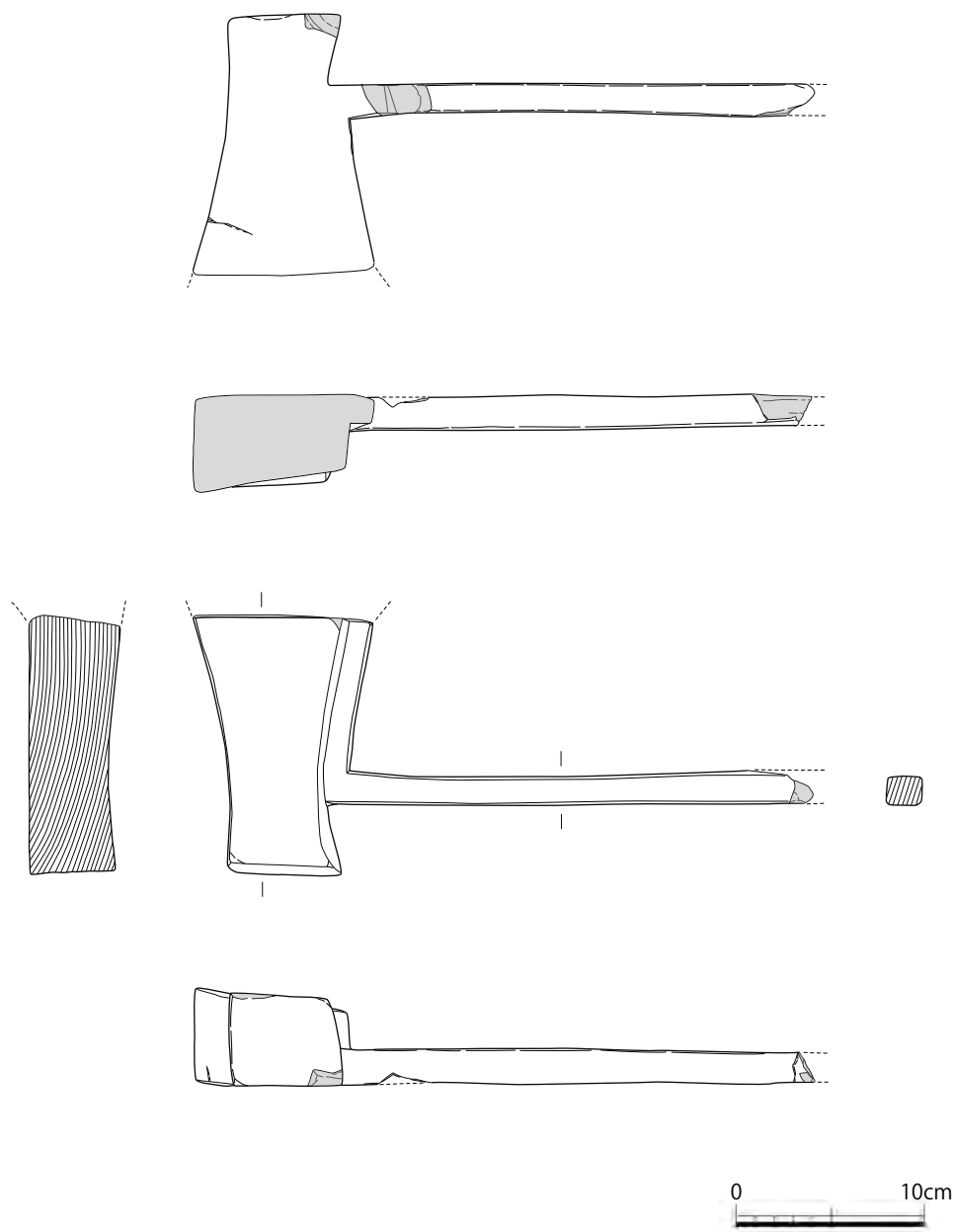


図1 乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片実測図 (S=1/4)

木から座板と脚部が作り出されたものである。座板は尻受けとして大きく反り、座板端面は上方を向いて形成される。側面からみると座板端部上辺はアーチ状になる。刳物腰掛C類にみられる棒状の端部は造形しない。脚は本来、座板下面長辺に沿って6本作り出されていたとみられるが、現状は片側の3本が残る。脚間上辺をアーチ状に仕上げ、棧木状の横木で各脚をつなぐ形に作り出している。乙木・佐保庄遺跡例(1)と同様に横木から連続し脚側辺に沿った一段低い張り出しも設けられている。座板・尻受けの高さが17.7～28.2cm、脚の幅が29.0～42.5cmである。刳物腰掛D類で、精巧かつ装飾性に富んだこの形状のものは、以下に述べるように複数点確認できるが、全体が把握できる典型例がこの事例で、これら類例と比較して完成形・到

達点にあるとみられる。したがってこの形状の脚をもつ刳物腰掛ないし脚付槽を「青谷型」として論を進めていきたい。青谷上寺地遺跡では、トチノキを用材とした弥生時代後期の青谷型の事例がもう1点存在している(3)¹²⁾。2よりは一回り小さい全体像に復元される。乙木・佐保庄遺跡例が刳物腰掛ではないか考えるきっかけとなった松原田中遺跡例(4)¹³⁾は、脚片のみであるが青谷型の刳物腰掛とみられる。これも座板下面の長辺片側に3脚で本来6脚が作り出されていたとみられ、脚間に横木と一段低い張り出しが作り出されている。樹種はスギである。2と同じぐらいの大きさに復元できそうである。脚下端のほうがやや幅広く踏ん張る形になり、B類に分類される。

青谷型は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の島根県姫

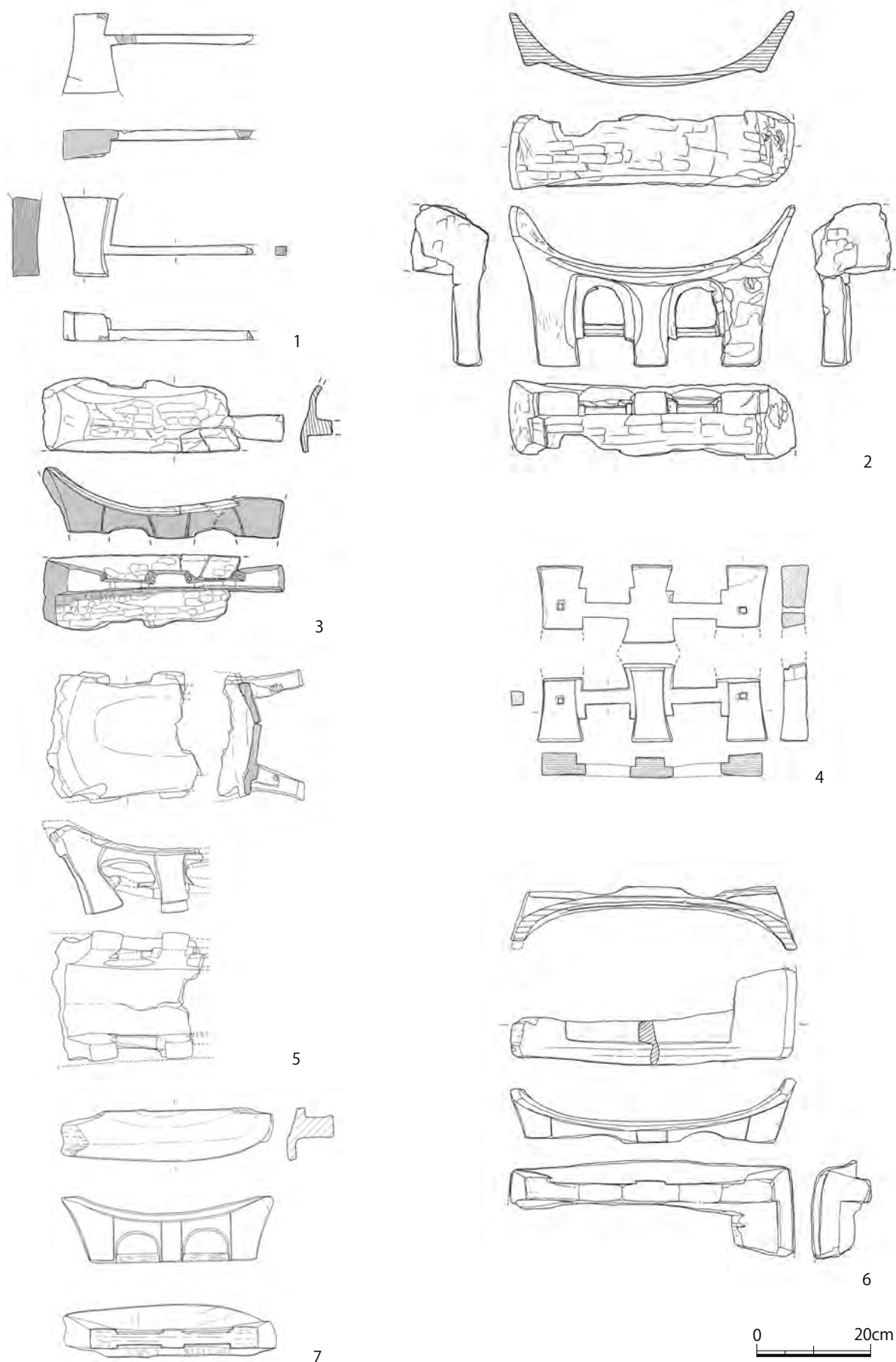


図2 乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片類例木製品①（刳物腰掛D類青谷型、S=1/10）

原西遺跡でも出土している（5・6）¹⁴⁾。5は座板と脚の半分以上が遺存し、各部位の大きさからみて青谷上寺地遺跡例（3）と同様一回り小さい形に復元される。6は脚の大部分が欠失しているが、残存高や座板幅からみて2に近い大きさに復元される。クロベ属を用材としている。また脚間の横木とアーチ状の張り出しによる大きな透かし孔ではなく、浮彫状に表現した青谷型が島根県山持遺跡にみられる（7）¹⁵⁾。帰属時期は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭である。全体の大きさは3・5と同様一回り小さく復元される。

青谷型はすべて破片資料であり、全体像の復元は推測になるが、典型例とした2に近い大きさに復元できるもの（4・6：座板・尻受けの外面中央の高さが18cm前後、脚の最大幅が43cm前後、座板幅が50cm前後）と、これらより一回り小さく復元されるもの（3・5・7：座板・尻受けの外面中央の高さが11cm前後、脚の最大幅が35cm前後、座板幅が45cm前後）に大きく分けられそうである。樹種が判明しているものでは、前者の2・4でスギを用材としており、より大型品を作成する上で適材であった可能性が考えられる。

乙木・佐保庄遺跡例の類例として抽出した刳物腰掛の青谷型は現状では鳥取県・島根県の弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけてのみみられることから、山陰地方で成立して展開したものと考えてよさそうである。

B. 2～4脚の刳物腰掛D類など（図3・表1）

弥生時代後期～古墳時代前期初頭の青谷型の成立を考える上で、前身形態といえる事例が青谷上寺地遺跡にある。弥生時代中期の刳物腰掛D類で、座板下面に4脚が作り出され、長辺側の2脚をつなぐ張り出しが作り出される（8）¹⁶⁾。前述の青谷型の小型例よりも小さい形状である。類似するものは同時期の福岡県惣利遺跡の刳物腰掛D類にみることができる（9）¹⁷⁾。座板下面の一方の長辺側に作り出された外面逆台形の脚は明確な2脚にはなっておらず、板状の脚の中央上部、座板に接する部分で方形に削り込まれ、未貫通の孔としている。これらが青谷型と乙木・佐保庄遺跡例の座板下面に作り出された脚と張り出し・横木による貫通孔の祖形をあらわしているようにみえる。なお、座板の端部は下方に折り返す形で棒状に作り出されている。同じように座板の端部が下方に折り返す形で棒状に作り出されている刳物腰掛D類の福岡県雀居遺跡例（10）¹⁸⁾がある。脚は板状で座板下面長辺両側に2脚作り出された構造で、直

接青谷型とは関連しないが、9と同様座板端部が棒状に作り出されるということで前述の刳物腰掛C類の成立を考える上で重要な資料である。

北部九州には、大分県下郡桑苗遺跡例（弥生時代前期後半～中期中）¹⁹⁾、佐賀県詫田西分遺跡例（弥生時代中期前半～中頃）²⁰⁾、福岡県下稗田遺跡例（弥生時代前期中頃～後半）²¹⁾のように、脚の形状から刳物腰掛A類ないしB類に分類されるが、座板下面長辺両側に作り出された板状の脚の中央下方に透かし孔を設けることで、脚下辺の中央が横木状になるものがある。青谷型の脚に作り出された横木の淵源は北部九州にありそうである。

現状の資料からは、スカシ孔の造形などによる装飾性のある脚をもつ刳物腰掛は、弥生時代前期～中期の北部九州に出現し、その後日本海ルートで山陰に伝播した可能性がある。刳物D類青谷型の完成は、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に複数の出土例がある青谷上寺地遺跡や姫原西遺跡からみて、山陰において達成されたと考えていいだろう。その後の古墳時代前期前半の大和の乙木・佐保庄遺跡例までをつなぐ資料は、現状では座板下面の四方に脚が作り出された刳物腰掛D類となる。

その資料として弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の京都府古殿遺跡刳物腰掛D類があげられる。2例確認でき、一つは、前述の北部九州弥生時代前・中期例と同様に座板下面長辺両側に板状に作り出された2脚、その中央に方形孔が設けられ、横木が脚部底辺に作り出されたような形となるものである（11）²²⁾。もう一つは横座板下面四方に4脚がそれぞれ作り出され、脚間に横木は作り出されないものである（12）²³⁾。また、滋賀県入江内湖遺跡には、古墳時代前期前半の刳物腰掛D類の事例がある（13）²⁴⁾。座板下面長辺両側に板状の脚が作り出されるものである。樹種はミズキ属である。さらに奈良県纏向遺跡では古墳時代前期初頭の辻地区4号土坑から、脚部が踏ん張る形の刳物腰掛B類に分類されるが、座板下面四方に脚が作り出される刳物腰掛が出土している（14）²⁵⁾。樹種はコウヤマキである。これらは、青谷型のような脚の装飾性には乏しいが、精巧な作りであり、木取りは青谷型と同じ横木取りである。大きさは、座板・尻受けの外面中央の高さが8～9cm前後、脚の最大幅が31cm前後、座板幅が35～45cm前後で、青谷型の小型の部類より総じてやや小さい。山陰から大和までの間で、刳物腰掛D類の青谷型の出土例は確認できない

表 1 乙木・佐保庄遺跡遺跡出土木製脚片類例木製品一覧 (番号は図 2・3 に対応)

番号	遺物名	遺跡名	出土遺構	時代・時期	外面中央高／端面高 (cm)	脚 上端幅／下端幅 (cm)	座板・槽 幅／奥行 (cm)	脚数	脚分類	木取り	樹種	特徴	文献
1	刳物腰掛	奈良県乙木・佐保庄遺跡	河道 (SD03)	古墳・前期初頭～前半	—／13.9*	33.4*／31.4*	—	4脚	D類	横木取り	ケヤキ	張り出しと横木をもつ4脚が作り出されたとみられる。脚が青谷型の脚付き槽よりも一回り大きく、腰掛の脚であったとみられる。青谷型。	註1) 文献
2	刳物腰掛	鳥取県青谷上寺地遺跡	溝 (SD38-3)	弥生・後期末～古墳・前期初頭	17.7／28.2	42.5／29.0	49.7／13.2*	6脚	D類	横木取り	スギ	脚内側の張り出しと横木が作り出されている。青谷型の典型例。	註2) (財) 鳥取県教育文化財団2001文献
3	刳物腰掛	鳥取県青谷上寺地遺跡	溝 (SD11)	弥生・後期初頭～後半	5.5*／11.4*	37.5／36.7*	42.7*／13.1*	6脚	D類	横木取り	トチノキ	青谷型。	註12) 文献
4	刳物腰掛	鳥取県松原田中遺跡	河道 (15流路)	弥生・後期～古墳・前期	13.7*／—	36.8／42.0	—	6脚	B類	横木取り	スギ	青谷型。脚内側の張り出しと横木が作り出され、脚下端幅が上端幅をわずかに上回る。	註2) (公財) 鳥取県教育文化財団調査室2018文献
5	刳物腰掛	鳥根県姫原西遺跡	出土地不明	弥生・後期末～古墳・前期初頭	10.8／15.3*	25.6*／20.6*	27.2*／21.2*	6脚	D類	横木取り	—	脚間に張り出しと連続する横木を作り出す。青谷型。	註14) 文献
6	刳物腰掛	鳥根県姫原西遺跡	河道 (B・BW区17層)	弥生・後期末～古墳・前期初頭	3.7*／11.3*	44.5／—	50.3／15.7*	6脚	D類	横木取り	クロベノ属	青谷型。	註14) 文献
7	刳物腰掛	鳥根県山持遺跡	河道	弥生・後期末～古墳・前期初頭	8.6*／11.7*	32.4／29.4*	37.1*／9.0*	6脚	D類	横木取り	—	青谷型。	註15) 文献
8	刳物腰掛	鳥取県青谷上寺地遺跡	包含層 (E層)	弥生・中期	7.0／11.5	25.2／19.1	30.9／14.0*	4脚	D類	横木取り	—	脚間をつなぐ板状の張り出しあり。座板中央に孔あり。	註12) 文献
9	刳物腰掛	福岡県惣利遺跡	河道	弥生・中期	6.0／10.8	—	24.0／—	2脚	D類	横木取り	—	座板両端を下方へ折り返し棒状の装飾とする。脚外面中央に、装飾性のある未貫通の方形割り込みあり。	註17) 文献
10	刳物腰掛	福岡県雀居遺跡	窪地 (SW01)	古墳・前期初頭～前半	6.0／10.3	13.4／ (12.0)	29.4*／13.7*	2脚	D類	横木取り	広葉樹	座板両端を下方へ折り返し棒状の装飾とする。	註18) 文献
11	刳物腰掛	京都府古殿遺跡	溝 (SD04)	弥生・後期末～古墳・前期初頭	8.8／10.8	30.5／24.2	36.8／23.5	2脚	D類	横木取り	針葉樹	脚中央に方形孔が穿たれる。これによつて脚下辺に横木が作り出されたような状態になる。	註22) 文献
12	刳物腰掛	京都府古殿遺跡	溝 (SD303)	古墳・前期初頭	9.6／13.1	31.8／26.2	35.8／15.6	4脚	D類	横木取り	—	張り出しと横木は無いが、4脚が作り出されたD類の刳物腰掛。	註23) 文献
13	刳物腰掛	滋賀県入江内湖遺跡	包含層 (第VI層・腐植土層)	古墳・前期前半	7.6*／12.0*	30.8／8.4*	46.2／26.7	2脚	D類	横木取り	ミズキ	座板平面形は両端面が直線並行で側面が外彎する形になり、端部を棒状にしないが、C類と共通する平面形である。	註24) 文献
14	刳物腰掛	奈良県姫向遺跡	土坑 (辻地区土坑4)	古墳・前期初頭～前半	7.4／10.4	(18.8)／ (20.4)	33.5／9.8*	4脚	B類	横木取り	コウヤマキ	脚は四方の外側へ跳ね張る形になる。座板は平面四角形。槽の可能性もあるが、長辺側には口縁部は作り出されない。	註25) 文献
15	刳物脚付槽	鳥根県姫原西遺跡	河道 (B・BW区10b層)	弥生・後期末～古墳・前期初頭	11.5／12.8	6.5*／4.5*	25.0*／10.3*	4脚	D類	横木取り	スギ	張り出しと横木をもつ4脚が作り出されている。長辺側にも口縁部が設けられており、槽とみられる。脚が青谷型。	註14) 文献
16	刳物脚付槽	福岡県那珂久平遺跡	堤遺構 (8号堰)	弥生・後期	7.6／13.7	24.8／23.5	50.0／23.3	6脚	A類	横木取り	—	張り出しと横木は無いが、6脚が作り出されている。長辺側にも口縁部が設けられており、槽とみられる。	註27) 文献
17	刳物脚付槽	富山県江上A遺跡	溝 (SD03)	弥生・後期	14.2／14.2	30.4／21.0	36.0／14.6*	4脚	D類	横木取り	スギ	脚間に張り出しと連続する横木を作り出す。平面長方形で底部が平坦な槽。脚が青谷型。	註28) 文献
18	刳物脚付槽	滋賀県斗西遺跡	河道 (SD01)	古墳・前期初頭～前半	10.8*／13.2	31.0／24.0	37.1*／4.5*	4脚	D類	横木取り	スギ	脚に張り出しは無いが、横木を作り出す。脚の内側の側辺に沿って刻線が施される。槽は江上A遺跡例とほぼ同じ形態とみられる。脚が青谷型。	註29) 文献

が、ここにあげた事例からみえる山陰以東は丹後から近江の湖東を経て大和へというルートが、乙木・佐保庄遺跡例の成立までの過程を考える上で重要である。

③脚付槽 (図3・表1)

前述のように刳物脚付槽にも乙木・佐保庄遺跡例と同様の脚部形態をもつものがある。まずあげられるのが、刳物腰掛D類青谷型が出土している姫原西遺跡の刳物脚付槽である(15)²⁶⁾。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭のものである。樹皮側に槽の上面が位置する形で横木取りし、一木から脚部を作り出しているのは、刳物腰掛と同様の木取り・造形方法である。槽部分は平面楕円形を呈していたとみられ、底面は平坦で、外周には口縁部となる立ち上がり造形され、全周していたとみられる。その口縁部の造形のためか、脚部の作り出す位置は、刳物腰掛に比べると槽下面長辺縁辺より中央に寄ったところになる。脚は刳物腰掛D類青谷型と同様の表面逆台形になり、横木が作り出されている。樹種はスギである。同じく槽部分が平面楕円形を呈するものとして弥生時代後期の福岡県那珂久平遺跡例がある(16)²⁷⁾。脚は槽下面に片側3脚で6脚作り出され、脚の表面からみた形は刳物腰掛A類に分類される長方形である。横木は作り出されていないようである。木取りや造形は姫原西遺跡例に共通する部分が多いが、槽部分の底面は湾曲する。この那珂久平遺跡例は、姫原西遺跡例に先行する事例とみられ、脚造形が共通する刳物腰掛D類青谷型と同様、北部九州から山陰へという系譜が想定される。おそらくこれらD類青谷型に関連する刳物腰掛と刳物脚付槽の工人は極めて近い関係にあり、両者が合わせて伝播していた可能性が考えられる。

姫原西遺跡例とほぼ同時期の刳物脚付槽の事例として富山県江上A遺跡例がある(17)²⁸⁾。槽下面四方に表面逆台形となる脚が作り出されたとみられ、長辺側の2脚をつなぐ横木も作り出されている。さらに横木から連続する脚内側辺に沿った張り出しがある。その脚の造形は乙木・佐保庄遺跡例に酷似し、青谷型である。槽部分は平面長方形で、4辺の口縁部が立ち上がり全周しており、底面は平坦である。脚を作り出す位置は、槽部分下面の長辺縁辺より中央に寄ったところになる。姫原西遺跡例とは槽部分の平面形の違いはあるが、脚の形状は類似し、木取り・造形が共通する。古墳時代前期前半には滋賀県斗西遺跡に江上A遺跡例に酷似する刳物脚付槽がある(18)²⁹⁾。槽部分とその長

辺側下面に2脚作り出された破片資料であるが、ほぼ江上A遺跡と同様の形状に復元できるであろう。脚は内側辺に沿った張り出しは作り出されないが、脚表面両側辺に縁取りの線刻がある。横木が作り出され、これも青谷型の形状といえる。このような類例の脚の形状から、乙木・佐保庄遺跡例は刳物脚付槽である可能性を考えうる。

これらの脚付槽の大きさは、槽部分の高さは外面中央高と端面高が那珂久平遺跡例以外はほぼ同じになり、13～14cm前後である。脚の最大幅は24～30cm前後、槽幅37～50cm前後である。前述の青谷型の典型例よりは全体に小さく造形されているといえ、青谷型の小型の部類より若干小さく、青谷型に関連する刳物腰掛D類の大きさに近いと現状の資料からはいうことができよう。

④乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片は刳物腰掛か

乙木・佐保庄遺跡1の類例をここまでみてきたが、座板ないし槽の下面四方、長辺側に片側2脚で横木が作り出されるものは、刳物脚付槽にしか確認できない。1も脚付槽になる可能性は否定できないが、脚の大きさと後述する青谷型の刳物腰掛D類をモデルにした埴輪の存在から、1を刳物腰掛の脚片とするのが適切と考えている。ここでは脚の大きさを検討してみる。

刳物脚付槽の姫原西遺跡15では、脚1本の最大高10.5cm、最大幅6.0cm、下端での厚さ3.3cmである。江上A遺跡17は、脚1本の最大高10.7cm、最大幅7.8cm、下端での厚さ2.8cm、横木の長さ12.2cmである。斗西遺跡18は、脚1本の最大高9.4cm、最大幅7.8cm、下端での厚さ2.8cm、横木の長さ15.6cmである。1と比較すると、脚部最大高で3～4cm、最大幅で0.5～2.5cm、下端での厚さで1.5cm前後程度1の脚部のほうが大きくなる。また横木の長さも1は一方が欠損しているにもかかわらず、10cm以上長い。1が、脚部の高さ・幅・厚さや横木の長さが脚付き槽より一回り大きいのは確実である。一方、前述の青谷型典型例の青谷上寺地遺跡2の表面の両外側2脚との大きさを比較すると、脚高さは14.5cm、最大幅9.5cm、下端の厚さ4.1cm、横木部分での外側2脚間の幅は25.0cmである。この数値は1に近く、現在確認できる類例から、1は青谷型の典型例の刳物腰掛として復元するのが適当で、それより一回り小さい刳物脚付槽ではないと考えられる。

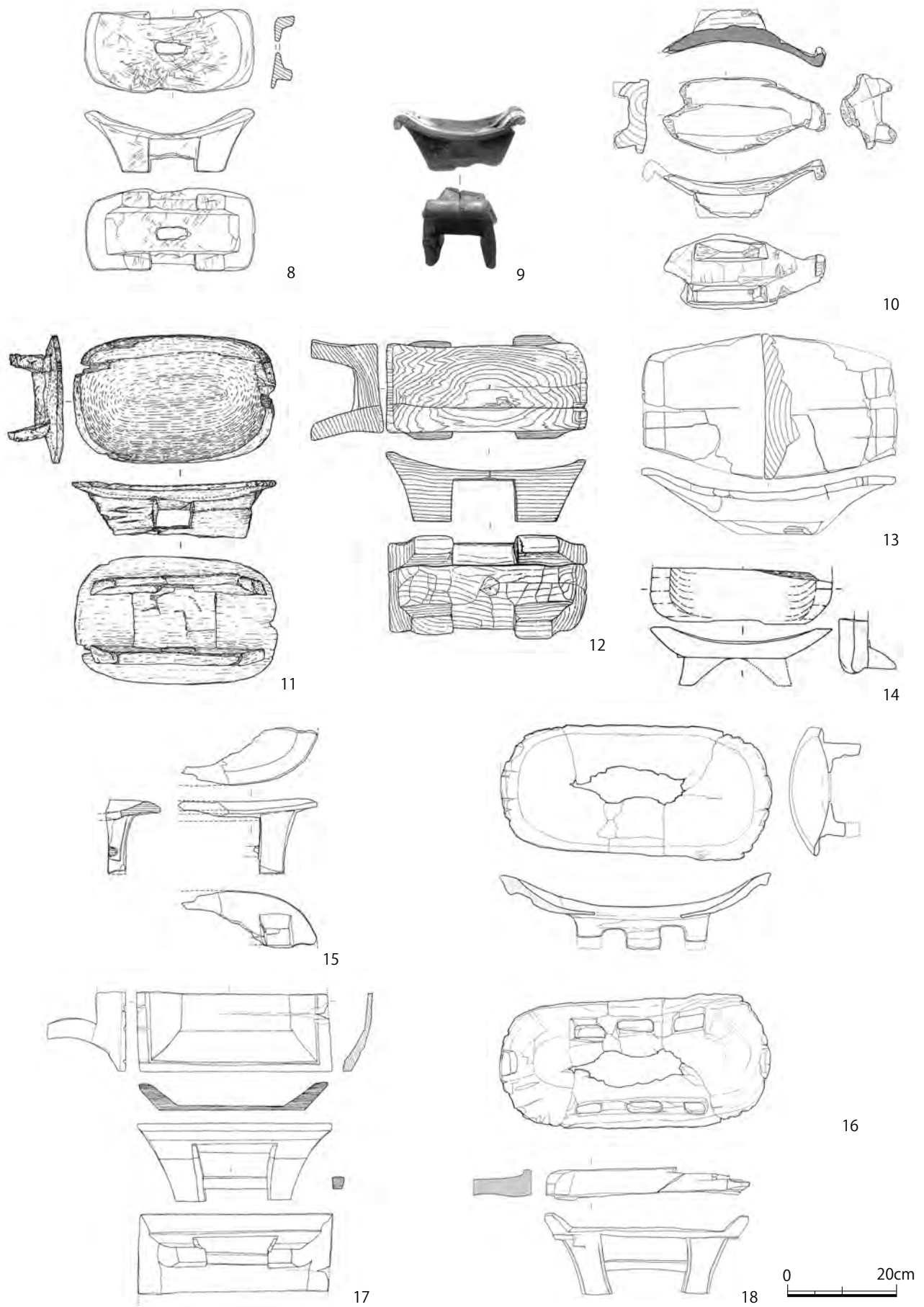


図3 乙木・佐保庄遺跡例類出土木製脚片木製品②(刳物腰掛(8~14)と刳物脚付槽(15~18)、S=1/10(写真の9もほぼ準じる))

IV. 大和での精製刳物腰掛の受容とその背景

乙木・佐保庄遺跡例は、青谷型とした青谷上寺地遺跡例、姫原西遺跡例などを典型例として、山陰で成立したとみられる精巧で複雑な造形をもつ刳物腰掛 D 類に系譜をもつことを明らかにしてきた。ここでは、乙木・佐保庄遺跡例にみられる大和での受容の過程を、D 類以外の刳物腰掛にも触れ、再度分布を整理しながらみていく。そしてこの木製品の使用場面や製作背景を明らかにするために、乙木・佐保庄遺跡例に共伴する翳形木製品のような弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の山陰での青谷型成立段階及びそれ以降の類例刳物腰掛と共伴する特殊な木製品をあげてみたい。

(1) 乙木・佐保庄遺跡例の系譜

繰り返し述べているように、座板下面に作り出された脚が長辺片側 3 脚の計 6 脚で、装飾性の高い脚側辺の張り出しと横木も作り出された青谷型は、山陰で成立したとみている。山陰のなかでの青谷型の成立地が、青谷上寺地遺跡に代表される因幡地方なのか、姫原西遺跡に代表される出雲地方なのかは、D 類典型例の検討からだけでは判然としないが、前述のように前身形態とみられる青谷上寺地遺跡の弥生時代中期の D 類 (8)、刳物腰掛以外の精巧な木製品、特に花卉の装飾が浮彫りされた木製高杯など青谷上寺地遺跡を発信元とする弥生時代後期を代表する木製品が存在している。また、青谷上寺地遺跡の東側に近在する松原田中遺跡では青谷上寺地遺跡 2 よりも後出するとみられる刳物腰掛 D 類青谷型 (9) があり、古墳時代に入ってもこの地域で引き継がれている。これらからみて、北部九州にはじまる装飾性のある刳物腰掛が、青谷上寺地遺跡を中心として因幡で発展をとげ、出雲にも伝播し、弥生時代後期の山陰を代表する威信財の一つとして機能したとみたい。

脚に横木は作り出さないが、座板下面長辺片側 2 脚で計 4 脚が作り出された精巧な刳物腰掛 D 類が古殿遺跡 12 であり、刳物腰掛 D 類青谷型の脚部と相互に強い関係性がある刳物脚付槽が江上 A 遺跡 17 である。弥生時代後期～古墳時代前期初頭には首長層の持物もしくは威信財といえる精巧な刳物腰掛・脚付槽が、日本海ルートで山陰～北陸間で伝播している様子がうかがわれる。間もなく近江の古墳時代前期初頭～前半には、17 に酷似する刳物脚付槽 18 が斗西遺跡にあり、脚部が一枚板状ではあるが、刳物腰掛 D 類の 13 が入江内湖遺跡にある。また大和では纏向遺跡辻

地区 4 号土坑から刳物腰掛 B 類の 14 が出土している。この分布状況は、すでに明らかにされている木製装飾高杯の弥生時代後期～古墳時代前期前半の様相に極めて近い³⁰⁾。弥生時代後期に精巧で装飾性の高い木製品が北部九州～山陰～丹後～北陸の日本海側で卓越し、それをおそらく近江の湖東・湖南のルートを経由して古墳時代前期初頭の大和で受容し、それをまた相互交流のなかで、湖東・湖南を経由して東へもたらした可能性が考えられる。

用材の観点からは、樹種の判明しているものではスギが多い。刳物腰掛 D 類では青谷上寺地遺跡 2、松原田中遺跡 4、刳物脚付槽では姫原西遺跡 15、江上 A 遺跡 17、斗西遺跡 18 である。関連して検討した北部九州の事例は、広葉樹を用材としており、スギを用材とすることも山陰で確立したのであろう。そこにはスギの大径木が確保しやすい環境と伐採・製材・加工における卓越した鉄器の使用が可能であった背景が考えられる。刳物腰掛 D 類青谷型の用材においては青谷上寺地遺跡 3 のトチノキ、姫原西遺跡 6 のクロベ属もあるので、広葉樹利用も並行して行われていたが、主たる用材はスギとなり、北陸や近江に展開していったと考えられる。ただし大和での受容においては、纏向遺跡 14 がコウヤマキであり、乙木・佐保庄遺跡 1 がケヤキであり、受容段階で用材において意図的な転換・選択があったとみられる。

(2) 精製刳物腰掛の共伴木製品

刳物腰掛 D 類青谷型が出土した青谷上寺地遺跡からは、浮彫花卉で装飾された木製精製高杯をはじめとして、装飾性の強い精巧な容器など多数出土している。弥生時代工芸の頂点がここにあったと言っても過言ではない³¹⁾。また弥生時代後期の山陰～北陸におけるトップクラスの首長の威信財のありかたを示しているのであろう。しかしここには古墳時代に入って整備される団扇形木製品、儀杖形木製品、蓋形木製品は顕著ではない。刳物腰掛 D 類青谷型に木製威信具が共伴する事例には姫原西遺跡の団扇形木製品がある。団扇形木製品は、筆者が分類した⑤類にあたり、古墳時代前期初頭は大和で成立したとみられる典型例 (③類) より前段階のものという位置付けである³²⁾。後述するように団扇形木製品③類と共伴する刳物腰掛は、大和と湖東・湖南にみられる。そのセット関係の初現として姫原遺跡例が位置付けられる。また、松原田中遺跡でも③類とは形状が異なるが、団扇形木製品とみられるものとの共伴が認められ

る。青谷上寺地遺跡にみられる卓越した精製容器と刳物腰掛などで行われる首長の主催する祭儀に、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭には、古墳時代の木製威儀具の祖形が加わり、それが大和で受容された可能性を考えたい。大和では纏向遺跡辻地区4号土坑に刳物腰掛と団扇形木製品③類と木製装飾高杯が共伴する。これが、山陰で行われた弥生時代後期の首長層の祭儀の道具立てを大和に受容し整備した姿ではないかと思われる。さらにその発展形として、乙木・佐保庄遺跡の刳物腰掛D類典型例と翳形木製品の共伴があると考えられる。さらにこれらの首長祭儀の道具立ては、伝播ルートを遡上する形で、古墳時代前期前半には、近江の湖南・湖東の入江内湖遺跡における刳物腰掛D類と団扇形木製品③類と纏向遺跡例に酷似する木製装飾高杯の共伴、刳物腰掛D類青谷型は確認できないが、団扇形木製品③類と木製装飾高杯が共伴する滋賀県草津市柳遺跡³³⁾、団扇形木製品と前述の青谷型脚の刳物脚付槽が共伴する斗西遺跡がある。さらに北陸では、隣接する遺跡での出土であるが、石川県小松市千代・能美遺跡出土の纏向遺跡例に酷似する木製装飾高杯³⁴⁾と千代遺跡出土団扇形木製品³⁵⁾がある。

このように青谷型刳物腰掛D類と団扇形木製品、纏向遺跡例を典型とする木製装飾高杯は、極めて近い関係で、古墳時代前期初頭～前半の首長が行う祭儀の道具立てにおいて、中心的な役割を担ったと考えられる。北部九州での祖形から山陰において古墳時代入る直前で完成形の達成、古墳時代開始段階での大和での受容と形態の定式化、伝播ルートの遡上する形で、セットとなつての湖南・湖東、北陸へ伝わり、団扇形木製品③類では東日本への展開がある³⁶⁾。

古墳時代前期前半における古墳に葬られるような首長の祭儀の道具立てとして、大和で整備された3点セットに代表される精巧な木製品の王権中枢における受容・整備・展開は以上のように整理できる。

V. まとめにかえて―腰掛形埴輪との比較―

乙木・佐保庄遺跡例の木製脚片を検討することで、刳物腰掛D類青谷型が、古墳時代前期初頭～前半の王権中枢及びその周辺において、団扇形木製品や木製装飾高杯とともに首長祭儀の重要な道具立ての一つとなっていたことを確認した。また、弥生時代以来の伝統的な刳物を木製腰掛の最上位にしている状況も確認できた。指物腰掛よりも刳

物腰掛はより径の大きい材が必要で、かつ成形過程で材を削り取り、削り屑となる部分が多い。刳物腰掛D類青谷型の完成には相当な熟練した技巧が必要とみられる。指物腰掛に比べると奢侈な材使用で、かつ製作が困難な製品が、刳物腰掛D類青谷型といえるであろう。用材としてはスギを主体に山陰で完成をみたものが、北陸と近江湖東・湖南に伝播したが、王権中枢の受容においてコウヤマキやケヤキに転換され、おそらくそれが刳物腰掛の最上位の材とされたとみられる³⁷⁾。

第Ⅱ章での腰掛形埴輪の評価にみたようにそのモデルは首長層の権威を示す道具立てであった。ここまでみてきた刳物腰掛D類青谷型をはじめとする刳物腰掛の精製品こそ、その形態、出土した遺跡が王権中枢ないし各地の有力首長層に関わった集落と考えられること、共伴木製品から首長層の祭儀に使用された道具の一つと考えられることから埴輪のモデルとして最もふさわしいことは明らかである。

腰掛形埴輪については、上原氏によって脚部下辺が著しく長く脚端面が湾曲しつつ幅を増す刳物腰掛C類をモデルにして成立したとされており、実際に古墳時代前期の大阪府久宝寺北遺跡出土刳物腰掛C類(図4-1)³⁸⁾と中期の大阪府巨摩1号墳出土腰掛形埴輪(図4-2)³⁹⁾をみると、座板の尻受けの湾曲、座板短辺の棒状表現、脚部の外反する形状などが酷似している。古墳時代の典型例といえる刳物腰掛C類が前期後半～中期にかけて近畿中央部を中心にみられ、腰掛形埴輪の大半は、この刳物腰掛C類をモデルにしたとみられる。中期初頭に近畿中央部で出現し、中期のなかで山陰から関東まで分布する。しかし類例は極めて少ない⁴⁰⁾。

腰掛形埴輪のなかに刳物腰掛C類とは形状の異なる脚が逆台形を呈するものがある。すなわちそれがここまでみてきた刳物腰掛D類青谷型をモデルにしているのではないかと考える。その腰掛形埴輪の事例としては、古墳時代中期中頃の京都府ニゴレ古墳例(図4-3)⁴¹⁾、倚座人物埴輪の腰掛の造形としては後期前半の奈良県石見遺跡例(図4-4)⁴²⁾があげられる。ニゴレ古墳例は、座板の湾曲する尻受けとその短辺に棒状表現があるが、両短辺にそって衝立があり、木製品にはみられない表現がなされる。また脚も座板の幅より大きく表現されており木製品とは異なる。これらは埴輪特有の誇張表現とせざるを得ないが、腰掛形埴輪における唯一といっていい刳物腰掛D類をモデルとしたものとし

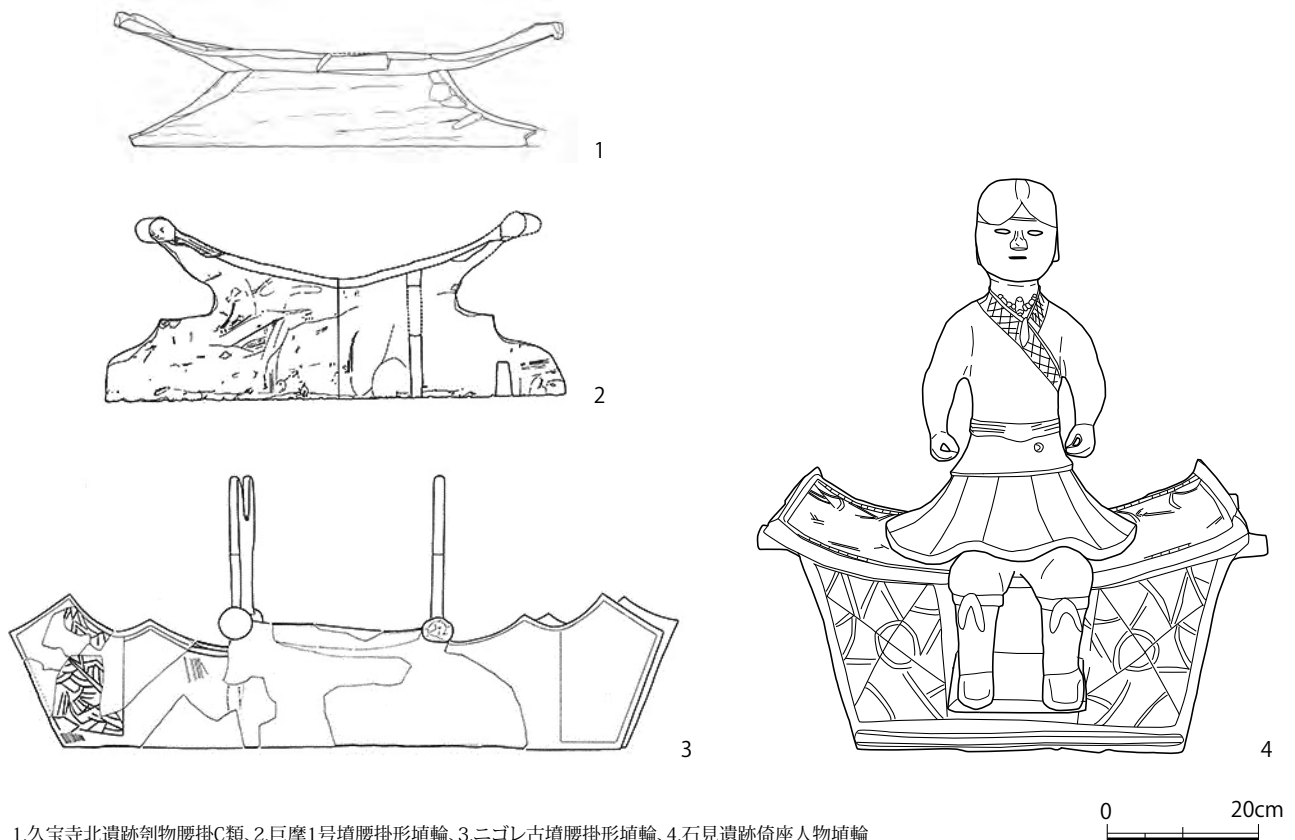
て評価できる。より刳物腰掛D類青谷型に忠実とみられるのが石見遺跡例で、座板の湾曲する尻受け、逆台形の脚となり、脚外面には直弧文が表現されるが、脚部分と倚座人物像の足がのる中央部とは縦方向の線刻で区別され、長辺片側2脚でその間に横木が作り出される乙木・佐保庄遺跡例のような刳物腰掛D類青谷型をモデルとした表現である。

古墳時代に入って刳物腰掛の精製品の主体はD類青谷型からC類へという変遷があったのだと思われるが、D類も腰掛形埴輪のモデルであった。重要なのは、腰掛形埴輪のモデルが刳物腰掛であるということである。木製腰掛には指物腰掛もあるが、前述の広瀬氏が指摘するように腰掛形埴輪のモデルにはなり得ない⁴³⁾。王権中枢で行われた祭儀の場で、中心人物が司る祭儀の道具立てにあった木製腰掛は刳物腰掛であり、それが埴輪化されたということを強調したい。

石見遺跡倚座人物埴輪をみると、今回検討した刳物腰掛D類青谷型をモデルにした腰掛形に座る正装した男子をあらわしている。関東地方の古墳時代後期の腰掛に座る人物埴輪を参考にとすると、埴輪群像の中心人物をあらわしたものとみられる。また、塚田氏が検討されているようにその

人物像の右手に前述の塵尾が執られる事例がある⁴⁴⁾。石見遺跡例の人物像右手は、別作りの何かの器物を握っていたような造形となっている。塚田氏はそこに塵尾が執られていたと想定している。前述のように刳物腰掛精製品と団扇形木製品の共伴例が古墳時代前期前半にみられる。時間・空間的には離れるが、木製威儀具と関連木製品の使用場面を写した埴輪群像の一つとして評価したい。

今回の検討の俎上にあげた刳物腰掛D類青谷型の古墳時代例、また関連する団扇形木製品、木製装飾高杯などの極めて精巧な木製威儀具とその関連木製品は、数量的に少なく、またその出土遺跡も限定的である。古墳時代の各集落で行われる祭儀で使用された道具というよりは、古墳に葬られるような首長が行った祭儀で使用された道具とみるべきものであろう。その祭儀の場面を象徴的に写し取ったものの一つとして、刳物腰掛D類青谷型をモデルにした腰掛形埴輪があるのだろう。首長の生前の祭儀で使用した道具を形象した埴輪を埴丘に樹立することによって、古墳に葬られる人物を象徴させたと考えられる。



1.久宝寺北遺跡刳物腰掛C類、2.巨摩1号墳腰掛形埴輪、3.ニゴレ古墳腰掛形埴輪、4.石見遺跡倚座人物埴輪

図4 刳物腰掛C類と腰掛形埴輪 (S = 1/10(写真トレースの4もほぼ準じる))

謝 辞

本論の着想・作成にあたっては、下記の方々・機関からのご教示をいただき、ご便宜を図っていただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

青柳泰介、北中恭裕、小山浩和、茶谷満、野原大輔、福田さよ子、穂積裕昌、本間元樹、
草津市教育委員会文化財課、(公財) 鳥取県教育文化財団調査室、
出土木器研究会、富山県埋蔵文化財センター

註

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所 2005 『乙木・佐保庄遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 92 冊
- 2) 2017 年に鳥取県教育文化財団調査室において松原田中遺跡出土木製品の資料調査を行った際に、当該木製品を観察することができた。松原田中遺跡例も脚片であり、乙木・佐保庄遺跡例と酷似する部分を多く確認できた。またその上部の座板も含めた全体像は青谷上寺地遺跡例の形となることも、青谷上寺地遺跡展示館の展示品の観察から確認できた。
(公財) 鳥取県教育文化財団調査室 2018 『松原田中遺跡Ⅲ』 一般国道 9 号 (鳥取西道路) の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXIV
- (財) 鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡 3 一般国道 9 号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書』 鳥取県埋蔵文化財調査報告書 72 冊
- 3) 鈴木裕明 2019 「埴輪化する木製品≪特集木器・木製品研究の可能性≫」 『古代学研究』 第 222 号
- 4) 置田雅昭 1988 「石製・埴輪・木製の椅子」 『ニゴレ古墳』 弥栄町文化財調査報告第 5 集
- 5) 上原真人 1993 「腰掛」 『木器集成図録 近畿原始篇』 奈良国立文化財研究所史料第 36 冊
- 6) 塚田良道 2007 「古墳時代における坐の系譜」 『人物埴輪の文化史的研究』 雄山閣
- 7) 広瀬和雄 2009 「古墳時代の椅子―首長の権威発揚の場をめぐる―」 『家具道具室内史』 創刊号
- 8) 小泉和子 2012 「出土腰掛の研究」 『家具道具室内史』 4 号
- 9) 国立民族学博物館標本資料目録データベース (<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mo/mocat.html>) 「腰掛け」 で検索。
井上耕一 2000 『アジアに見るあの坐り方と低い腰掛』 丸善ブックス
- 10) 以下、刳物腰掛の部分名称については、前掲註 5) 文献 (p.197、

fig.168) にならう。

- 11) 前掲註 2) (財) 鳥取県教育文化財団 2001 文献。
- 12) (財) 鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡 4 一般国道 9 号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 鳥取県埋蔵文化財調査報告書 74 冊
- 13) 前掲註 2) (公財) 鳥取県教育文化財団調査室 2018 文献。
- 14) 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999 『姫原西遺跡』 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ
- 15) 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005 『山持遺跡 vol.1』 国道 431 号道路改築事業 (東林木バイパス) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2
- 16) 前掲註 12) 文献。
- 17) 夜須町教育委員会 1997 『惣利遺跡Ⅰ』 夜須町文化財調査報告第 38 集
- 18) 福岡市教育委員会 2003 『雀居 八』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 747 集
- 19) 大分県教育委員会 1992 『下郡桑苗遺跡Ⅱ』 大分県文化財調査報告書第 89 輯
- 20) 千代田町教育委員会 1983 『詫田西分貝塚 高志神社遺跡』 千代田町文化財調査報告書第 2 集
- 21) 行橋市教育委員会 1985 『下稗田遺跡』 行橋市文化財調査報告書第 17 集
- 22) 京都府教育庁指導部文化財保護課 1978 「古殿遺跡発掘調査概要」 『埋蔵文化財発掘調査概報 (1978)』
- 23) (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 『古殿遺跡』 京都府遺跡調査報告書第 9 冊
- 24) 米原町教育委員会 1988 『入江内湖遺跡 (行司町地区) 発掘調査報告書』 米原町埋蔵文化財調査報告Ⅸ
- 25) 奈良県立橿原考古学研究所 1976 『纏向』 桜井市教育委員会
- 26) 前掲註 14) 文献。
- 27) 福岡市教育委員会 1987 『那珂久平遺跡Ⅱ』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 163 集
- 28) 富山県埋蔵文化財センター 1984 「江上 A 遺跡」 『北陸自動車道遺跡調査報告』 上市町教育委員会
- 29) 能登川町教育委員会 1993 『斗西遺跡 (2 次調査)』 能登川町埋蔵文化財調査報告書第 27 集
- 30) 久田正弘・石川ゆずは 2005 「白江梯川遺跡の木製高杯について―資料提示と問題提起―」 『石川県埋文化財情報』 第 14 号 (財) 石川県埋蔵文化財センター

- 石川ゆずは 2019「纏向遺跡辻土壌 4 出土装飾木製高杯の系譜
《特集 木器・木製品研究の可能性》」『古代学研究』第 222
号
- 31) 樋上昇 2008「精製容器と粗製容器」『弥生の至宝～花卉高杯と
その背景』鳥取県埋蔵文化財センター
樋上昇 2009「木製容器からみた弥生後期の首長と社会～青谷
上寺地遺跡と朝日遺跡からの素描」『木・ひと・文化～出土木
器研究会論集』出土木器研究会
茶谷満 2013「青谷上寺地遺跡出土の木製容器」『木製品から見
た古代の暮らし』島根県古代文化センター
原田昌幸編 2015『日本美術全集第 1 巻 縄文・弥生・古墳時
代日本美術創世記』小学館
など。
- 32) 鈴木裕明 2001「団扇形木製品と塵尾」『茨城大学考古学研究室
20 周年記念論文集＝日本考古学の基礎研究＝』
- 33) 滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 2008『柳遺跡Ⅳ』
草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調
査報告書Ⅺ
- 34) 石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2012『千
代・能美遺跡』
- 35) 石川県立埋蔵文化財センター 1992『千代』
- 36) 鈴木裕明 2003「古墳時代前期の団扇形木製品の展開とその背景」
『初期古墳と大和の考古学』学生社
鈴木裕明 2007「元総社牛池川遺跡出土の木製威儀具について」
『総社閑泉明神北Ⅳ遺跡・元総社牛池川遺跡・元総社北川遺跡・
元総社小見内Ⅴ遺跡』Ⅵ (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 37) 奈良県谷遺跡に古墳時代中期とみられるコウヤマキ製刳物腰
掛 C 類が複数ある。また、古墳時代のコウヤマキ製品は王権
中枢に占有された稀少材によるものと考えられる。さらにケ
ヤキ（槻木）は、その素材を用いたと考えられる厨子や高御
座の椅子から古代王権における表象物の重要な素材として神
聖視された。
奈良県立橿原考古学研究所 2000『大和木器資料Ⅰ』橿原考古
学研究所研究成果第 3 冊
鈴木裕明 2013「古墳時代王権中枢のコウヤマキ利用」『博古研
究』第 46 冊
仁藤敦史 2009「古代王権の表象－槻木・厨子・椅子－」『家具
道具室内史』創刊号
- 38) 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 1987『久宝寺北
(その 1 ～ 3)』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文
化財発掘調査概要報告書
- 39) 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 1981『巨摩・瓜
生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘
調査概要報告書
- 40) 玉井功 2018「椅子形埴輪の新例とその意義－国府遺跡出土埴
輪の再検討－」『古代文化』第 70 巻第 1 号
- 41) 天理大学博物館学研究室 1988『ニゴレ古墳』弥栄町文化財調
査報告第 5 集
- 42) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1988『大和考古学資料
目録 石見遺跡資料』第 15 集
- 43) 前掲註 7) 文献。
- 44) 塚田良道 2007「塵尾について」『人物埴輪の文化史的研究』雄
山閣